

コロナ禍にあって考えた事 ～分断への挑戦～

ピアスタッフ 櫻井 博

今年もあと一ヶ月あまりとなりました。これを書いているのは11月の末で、報道では東京都の新規コロナ感染者が二日連続 500 名を超えた日でもあります。コロナ禍では生活の自粛を強いられ、行動範囲も狭められました。

今年は思いがけなく空前の苦難に見舞われました。今は有事だと政治家も言われました。

5月の緊急事態宣言下、メンバーさんの電話を受ける機会がありました。電話の向こうでは、コロナを吹き飛ばすような元気な声も時折ですが聞かれ、電話を受けるこちらが励まされ、メンバーさんが私の想像以上に生活を粛々とこなしているように感じることもありました。スタッフがめげそうなこの時、このコロナ禍を、自分なりに考えてみました。

当事者スタッフである私は、過去、精神的な大きな不調な時期に、保護室、身体拘束も経験しました。行動の制限が強制的に課され大変つらい思いをしました。コントロールできない病気が故という理由でしたが、この経験は変な話ですが、コロナ禍では大いに役立ちました。今思えば、病院でコロナ禍より自分にとってはきつい、そして辛い行動制限の体験をしたからではないかと思います。もちろん行動制限だけがつらいのではなく、人との心理的断絶（分断）のつらさは、今思い出しても想像を絶するものがあります。

さて最近、SDGs（エスディーディーズ／持続可能な開発目標という意味）という言葉がテレビなどで目にするようになりました。

このSDGsは国連が進めている「誰一人、取り残さない」という理念に基づいた2030年までの全世界共通の行動計画です。温暖化などによって様々な自然災害が発生している中で、私たちが今後も「持続可能な」生活をするために、「国や地域を超え手を取り合い」19の目標を立てたものがSDGsなのです。ところが、このコロナ禍で接触（手を取り合うこと）が強く制限されるという分断化した状態が続いています。ただ、このつらい状況で、世の中を考える時、私自身精神の病によってたくさんの辛い体験をしたことで色々な人と出会い、人の痛みを知ることができました。このような心理的経験が、分断を超えて、この世界を変えていく原動力になるにもなるのではないかと思った今年の年末です。

最後になりますが、棕櫚亭の理念である「精神障がい者の幸せ実現」はスタッフの願いであると同時に私たち精神障がい当事者自身の幸せ実現でもあります。今年は大変な年となりました。このコロナ禍で、7万人が解雇されたという話も報道で耳にします。そういう意味で経済的困窮に陥り、明日の生活をどうしていこうかと頭を抱えている人たちがたくさんいることに心が痛みます。来年はよい年になることを強く願っています。少し早いですが良い年をお迎えください。

